

## 本化建宗の根本精神に還れ

半 澤 經 一

我宗祖日蓮大聖人が建長五年四月二十八日千光山旭ヶ森に於て、法華經の肝心諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字を建立せられて以來、四ヶ格言を旗標として、「諸宗無得道、法華唯一成佛」の毒鼓を亂打し諸宗を折伏し僅か五尺の身を日本全土に置き處も無き程の大迫害を被り然もそれを甘受し妙法廣布に御一生を捧げられたのは何の爲で在つたか？其は實に、三千年前の昔、虚空寶の佛勅を果し后五百歲中末法萬年の暗を照し極惡最鈍の衆生を救濟せんとするより何物も無かつたのである。

然るに、六百數十年後の現下の門流は如何？果して、宗祖の「各々我弟子とならん人々は一人も臆しをもはるべからず親を思ひ妻子を思ひ所領をかへり見ることなかれ、無量劫よりこのかた親子のため所領に命すてたる事は大地微塵よりもをほし法華經のゆへには、いまだ一度もすてず乃至和黨共二陣三陣つづきて、迦葉阿難にも勝れ天台傳教にもこへよかし、わずかの小島の主等が威嚇さんを恐ぢては閻魔王の責をばいかんがすべき」云々（縮遺一三八八）の誠めを守り、眞に我不愛身命但惜無上道、身輕法重死身弘法の誓願を立て、妙法廣宣流布、一切衆生救濟の大使命の爲に身命を捧げて盡力して眞の日蓮門下として恥かしからぬ者が果して、幾人か居よう？

我等は末法の現代に只だ偶然に人身を受け、偶然に法華經に値ひ、然して、偶然に出家した者では無い。さればとて、勿論彼の小乘經典に説くが如き、十二因縁等に據て、人界に生を受け、職業的に、即ち、衣食住等を充し、今生の生活を續けんが爲め出家し、僧尼と成つた者でも無からう。

今難受の人身を末法の現代に受け、難値の正法本門壽量の觀心妙法蓮華經に値ひ奉り、唯だ一人のみ修行するばかりで無く、進んで此の大法を弘通し、廣く一切衆生を救濟す可き僧侶と成つたのは、深い宿因に據る事である。何故なれば妙經を拜し奉れば、法師品には「當レ知是諸人等、已曾供養十萬億佛」於諸佛所一成就大願一慙一衆生一故生一此人間一云々 又云是人一切世間所應一瞻奉一應下以一如來供養一而供養之上當レ知此人是大菩薩成成就阿耨多羅三藐三菩提一哀一慙一衆生一願生一此間一廣演二分一別妙法華經乃至藥王當レ知是人自捨一清淨業報一於一我滅後一慙一衆生一故生一於惡世一廣演一此經一若善男子善女人、我滅度後、能竊爲一人一説一法華經乃至一句一。當レ知是人則如來使、如來所遣行一如來事一何況於一大衆中一廣爲一人説。」云々勸發品には「一者爲一諸佛護念一二者植一諸德本一三者入一正定聚一四者發下救一一切衆生一之心一善男子、善女人如レ是成成就四法於一如來滅後一必得一是經一」云々とあり、又宗祖の御書を拜せば諸法實相抄に、「若し蓮地涌の菩薩の數に入らば豈日蓮が弟子檀那地涌の流類に非ずや、經云能竊爲一人一説一法華經乃至一句一、當レ知是人則如來使、如來所遣行一如來事一。豈別人の事を説き給ふならんや。(乃

至)いかにも今度信心をいたして、法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをり給ふべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釋尊久遠の弟子たる事あに疑はんや、經云我從久遠來教化是等衆とは是也。末法にして妙法蓮華經の五字を弘めん者は男女はきらう可からず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目也。日蓮一人はじめは南無妙法蓮華經と唱へしが二人三人百人と次第に唱へつたふる也。未來も亦しかるべし、是あに地涌の義に非ずや。」云々(縮遺九六一頁)と明示せられて居る。此等の法華經及び祖書の明文に據れば、我等の宿業、使命、責任は甚だ明瞭な事である。特に涌出品を拜せば我々は本化地涌の六萬恒沙の菩薩の一員にして、共に止迹召本され法華經の會座に連り、壽量の説を聽聞し神力品に於て、塔内別附囑を被り、囑累品に於て總附囑を受け、佛勅に依り、惡世末法妙法宣布、衆生救濟の爲め現在人身を此土に受け、出家弘道に入つた事は疑い無き事實であり、我等は決して、只偶然に、人身を此土に受け、今生の衣食住名利榮譽等を充たさんが爲め職業的に出家した者で無い事は言をまたない。

然るに、我門下を見るに宗祖大聖人に對しては佛勅を被り妙法廣宣流布一切衆生救濟の爲め末法の初めに出現された本化唱導上首に疑を起す者は無いが我等末代門下の各自も亦本化地涌の居士にして佛勅に依り此土に出現せる事を堅く信ずる者が此廣い門下に果して幾人か居よう?

又佛勅に隨ひ末法萬年令法久住衆生濟度の爲め我不愛身命但惜無上道の誓言を立て、活動してゐる者が果して幾人か居よう？

斯く疑つて現下の教界を見るに、妙經及び祖訓に餘りに遠く隔てゐるに驚かざるを得ない。今や、我門下は、佛勅使命責任等に就いて、何等の理解も無く、凡俗と何等異り無く、日々夜々衣食住の美を貪り名利榮譽等果なき煩惱に執着し身心を驅使され、自ら、貪瞋痴の三毒の炎を以て、發心般若解脱の三徳を燒却し、無間墮地獄の業を作りつゝあるでは無いか？

斯く思ひ續けて暗涙にむせぶ時、私は佛說法滅盡經を拜讀して再び愕然とした。それは法滅盡の相の第一ヶ條に著<sup>三</sup>俗衣裳<sup>二</sup>樂<sup>三</sup>好袈裟五色之服<sup>一</sup>とあるが現下の教界の人々が何等反省なく着てゐる、假裝行列にも似たる服裝を如實に豫言してゐるものではなからうか。

然して、其次條に、飯酒噉肉、殺生貪味、憎賢嫉善、荒撫寺廟、偷三寶物、貪財不施、販賣奴婢、耕田種植、姪姪濁亂、不修戒律、懈怠不學、貢高求名、望人供養等の十四ヶ項目あるが、悉く是れ現下教界の實生活を如實に寫せるものであらう。我等は餘りにも、法滅盡の十四ヶ條の相が現代教界の實狀と合致して居るに驚くよりも寧ろ悲み慨かざるを得ない。

如斯教法を末法の現代に弘布せん爲めに釋尊は止迹召本し附囑して、今日に在らしめたものであら

うか。これ墮落に非ずして何ぞ！腐敗に非ずして何ぞ！佛敎の大違反、畸形の教界！嗚呼、釋尊並に宗祖大聖人等の諸先哲は如何に驚き慨き悲まれて居る事であらうか。

左傾思想家は「宗敎は阿片なり」と否定してゐる。然し現下の如き教界であるならば寧ろ阿片より怖るべき劇毒であらう。何んとなれば阿片は只だ肉身を害して、惠命を害せざるに對して、宗敎は現在に社會を害し未來は無間大地獄に導き、將來の世に對して永遠の大苦を與ふる害があるからである。我等の尤も怪訝に堪へざるは現下教界のかくの如き衰頹にもかゝらず尙ほ宗徒の此衰頹惰眠を憤慨せざる事である。否！其憤慨を實行にうつして、蹶起せざる事である。今や我教界は萬事を抛つて唯だ改造改革否！！宗祖末法建宗の眞精神に還る一事あるのみだ、然して、此は難中の最難事である。常人の能はざる事は論をまたない。

されど第二の日蓮出でよと呼ぶ事勿れ、涅槃經に云はずや、若善比丘、見壞法者、置不呵責、驅遣舉處。當知是人、佛法中怨。若能驅遣呵責舉處是我弟子、眞聲聞也と。宗祖大聖人云はずや「今既に難得人界に生を受け、難値の佛法を見聞しつ、今生を默止しては又何れの世にか生死を離れ菩提を証す可き、夫一劫受生の骨は山よりも高けれども佛法の爲には未だ一骨をも捨てず、多生恩愛の涙は海よりも深けれども尙後生の爲めには一滴をも落さず」(五七三頁)「各々思ひ切り給へ、此身を法華

經に替るは石を金にかへ、糞に米をかふるなり。」(二三八八)「命を釋尊と法華經に奉り慈悲を一切衆生に與へて、謗法を責るを心得ぬ人は口をすくめ、眼を瞋らす、汝實に後世を恐れれば身を輕しめ法を重んぜよ」(五七五)云々と、特に法華經の明文に隨へば我等は本化地涌の大士也、第二、第三の日蓮とは即ち我等の外に別にあるものではない。二陣三陣つゞいて、天台傳教にも越へよかしとは實に我々を指せしものにして、現下の教界復興、興隆は實に我等の使命であり、責任である。されば我等は進んでは佛敎を果し退いては佛法中怨の責を免る可く、宗門を復興し、妙法宣布衆生濟度の爲めに起ち、使命責任を果さねばならぬ。

我等は、宗門復興を叫ぶ前に先づ各自が宗祖建宗の根本精神に還らねばならぬ。我等の本化立宗の根本精神に還る事に依て、初めて佛勅を果すことも出來れば妙法廣宣流布一切衆生救濟の大願も成就し、事の常寂光土も建立されるのである。願はくば諸兄よ我不愛身命但惜無上道の誓願を立て、佛勅を果されん事を望む。(六、一、十九稿)